二〇二〇年七月二四日

ギプスの児抱いて汗の香いとほしむ　なつき
青田ゆく風の翼の渺渺と　やよい
蝉しぐれ包丁の手を急かせけり　満天

二〇二〇年七月二三日

採れ過ぎてあの手この手や茄子料理　菜々
コロナ禍に負けじと処する大暑かな　三刀
箱庭の芝生の中に子犬飼ふ　ぽんこ
藻の花を潜る魚影のいと速し　智恵子
コロナ禍の賓頭盧様は簾奥　明日香
鉾立ては無してふコロナ禍の憎し　もとこ

二〇二〇年七月二二日

青田風ま白き鷺の見え隠れ　隆松
お泊まりの孫寝かしつけ冷し酒　なつき
朝顔の鉢いだきあぐ一年生　もとこ
夜濯ぎをテラスに干して旅終る　たか子
蔵屋敷古し老舗の麻のれん　智恵子

二〇二〇年七月二一日

恙なき八十路の夫婦冷や奴　菜々
神苑の上枝飛び交ふ蝉つぶて　せいじ
仏壇の西瓜たたいて子ら拝む　なつき
片陰に出棺待てる霊柩車　素秀

京の辻暮れて賑はふ川床提灯　もとこ
冷奴庭の青紫蘇きざみ添へ　菜々

二〇二〇年七月二〇日

まだはねる夫の釣果の鯵料る　やよい
溶接の鉄に弾ける汗しづく　素秀
山車蔵の龍遊ばせて土用干　隆松

二〇二〇年七月一九日

子と散歩茅の輪くぐりて帰りけり　なつき
青葉木菟巣立ち鎮もる大欅　うつぎ
真清水にどしりと沈む豆腐かな　素秀

二〇二〇年七月一八日

暑気払泡こまやかに抹茶点て　満天
残像に覆ひ被さり大花火　みきお
アナベルが緑になれば梅雨明けと　明日香
梅雨晴の波止に釣竿ひしめきて　やよい
幼子の手の届きさう青瓢　せいじ

毎日句会みのる選・二〇二〇年七月二六日